

D-10 民話と教育 —小学校の国語教科書を中心として—  
同志社女大家政 片山登美子

目的 民話は、日常生活の厳しさの中から語り伝えられて来た日本人の伝統的な生活感情をこめたメルヘンとして、最近再評価されている。民話の善さを損わず、本来の姿のままに子供達に触れさせ、次に狭く失われてゆく心の豊かさや温かさを、民話を通して発見させたいと願う立場で、民話絵本の研究を行なったが、今回は昭和46年度の小学校指導要領の改訂を機会に、国語教材として扱われている民話(日本昔話)の実態と、現在それが母親へいかに伝承されているかを考察する。

方法 ①民話の本質、民話を子供に語り継ぐ意味は何か。民話の特性、文学教育としての価値。教育政策の民話への影響。再話。その他につき文献資料をもとに考察した。②オ3、オ4期国定(復刻版)・昭和44年検定・昭和46年新改訂の各国語教科書に教材として扱われた民話(日本昔話)の実態につき分析を行った。③女大生と母親を対象に民話伝承の実態を調査した。④国語教科書「一寸法師」について考察した。

結果 桃太郎など日本十大昔話の数は、オ2期(明治43年)～オ5期(昭和16年)までと昭和44年版とでは余り差がないが、オ5期まで必ず見た桃太郎が影を潜め、代って一寸法師が多い。昭和46年の新教科書は十大昔話の数が減っている。女大生、母親への意識調査では、小学校国語に昔話を教材として多くとり入れた方がよいが過半数以上、そう思わない人の理由は、むしろ絵本や語りで幼い頃に与える方がよいと考えている。そして夢をもたせる、子供との対話などの目的で、子供に日本昔話を伝えたいと女大生79%、母親86%が答えていた。